

『女風俗玉鏡』と『女中風俗艶鏡』

～江戸時代女性の身だしなみ～

日々の暮らしや行事の中で、女性にとってファッションに心をくだくことは今も昔も楽しみの一つです。女性の身だしなみについて書かれた教養絵本『[女風俗玉鏡](#)』・『[女中風俗艶鏡](#)』には、暮らしを楽しむ女性が生き生きと描かれています。

この本の文章は江島其磧（えじまきせき）（1667～1736年）、絵は西川祐信（すけのぶ）（1671～1751年）が担当し、1732年に出版されました。なお、『女風俗玉鏡』と『女中風俗艶鏡』はタイトルは異なりますが内容はほぼ同じです。女性の読み物として人気があったようでそれぞれのタイトルで再版されており、50年後に出版されたものもあります。

当館所蔵の『女風俗玉鏡』上巻と『女中風俗艶鏡』下巻はそれぞれ来歴が異なるものですが、この資料ガイドでは両方を組み合わせ、特に女性の衣服についてスポットを当てて紹介します。



『女風俗玉鏡』羽根つき・雛飾り

正月の羽根つき、上巳の節句の雛飾りは女性にとって特に

楽しみな遊戯や行事です。右頁にはきものの肩を縫い上げた少女が羽根つきに興じています。まだ髪の短い女の子は10歳くらいまでの子供が着る四つ身のきものを着ています。左頁は上巳の節句の一場面です。子供たちが晴れ着で雛飾りを楽しんでいます。



『女風俗玉鏡』物干し

右頁は梅雨明け後の土用干しでしょうか。夏向きの単衣のきものを着た女性が干し物と洗い物をしています。きものに風を通して日本の高温多湿に備えます。

左頁はきものを洗い張りした後、伸子(しんし)張り仕上げをしている様子です。きものは丸洗いに向かないので、解いて裁ち目を縫うと元の反物に戻ります。それを干して糊をつけて仕上げる時に伸子を打ちます。



『女風俗玉鏡』婚礼

婚礼の席に飾られる島台(しまだい)には、松竹梅に尉と姥、鶴亀が配されています。その前に新郎新婦が座し、契りの酒を酌み交わそうとしています。新婦は白の打掛姿で神妙な様子です。右頁は異時同図法で新婦が色直しの衣装に着替えているところを表しています。



『女中風俗艶鏡』 聞香

右頁は聞香の一場面です。上流層の町人の中では教養の一つとして香りを聞きあてる趣味が広がりました。華やかな意匠の小袖や振袖に身を包んだ女性が集います。

左頁には三味線と箏を合奏する女性が描かれています。裕福な女性の高尚なたしなみでもあり、伊達紋のある腰高模様の小袖を打ち掛けて演奏しています。



『女中風俗艶鏡』 紅葉狩り

秋の行楽の一つである紅葉狩りの様子が描かれています。

二人の女性は、外出時に頭から被る小袖形の被衣(かずき)という衣服を被っています。日差しや埃よけにもなりましたが、上流婦人のおしゃれでもありました。小袖の裾は腰紐で絡(から)げ、歩きやすく工夫しています。

参考文献

『[上方風俗画の研究～西川祐信・月岡雪鼎を中心に～](#)』山本ゆかり著 藝華書院 2010年

『[西川祐信研究会論文集](#)』石上阿希編 立命館大学アート・リサーチセンター 2013年

(2017年2月15日公開)